

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

前顧問の棚橋先生に代わって、新しく弓道部の顧問になった吉村先生が「斜面(弓の引き方の一つ)」を部員に指導した。調子が上がりだした部員がいる一方、これまでの引き方にこだわっていた篠崎凛は不調が続いていた。そんな中、吉村先生が練習後に今度の試合のオーダー(メンバー)を発表した。

「Aチーム。大前、本多陽子。二の立ち、前川美晴。大後、篠崎凛」

えっ、と周囲からも、凛自身の口からも声が漏れた。最近調子のいい人たちはたくさんいるし、凛の調子がずっと悪いことはみんな分かっていたはずだからだ。そろそろ決めなければならないことは分かっていたけれど、今日の成績だけでオーダーを決めるなどとは先生も言っていない。不満を感じたものはいたのかもしれないが、もちろん表立って

ことではない。

女子Dチームまでのメンバーが発表された。綾乃は残念ながら出場出来なかったようだが、ちらりと様子を窺うとおどけたように肩をすくめてみせた。最近頑張っていたのに、またやる気をなくさなければいけない。

凛が何となく釈然としない思いを抱えているのを見抜いたのか、みんなが着替えに向かう中、ぽーっと立ちすくんでいたところに吉村先生が珍しく近寄り、話しかけた。

「びっくりしてるみたいだね」

「……はい」

先生が人混みを避けるように射位に向かい、端から足を下ろして的就見ながら坐ったので、凛もそのやや斜め後ろに正座した。

「篠崎さんは、いずれ調子を取り戻すって、信じてたよ。あなたは素直で、射形もきれいだもん。そう言ったよね、最初の時に」

それではあはれは、ただのお世辞ではなかったのだ。

「——確かに今日は少し調子が戻りましたけど、別に何か掴んだって感じでもないんです。あれこれ悩んでも仕方ないって、吹っ切れただけで」
「それでいいんだよ。それでいい。——悩む必要がないってことじゃないからね。悩んで、考えて、考えて、どこかで吹っ切って、結局練習する。その繰り返し」

「……先生にも、スランプありましたか」

おずおずとそう聞くと、吉村先生はぶはっ、と豪快に笑った。

「あった、あった。当たり前じゃん。泣きそうになった——てか泣いたことあるよ。悔しくて、自分が情けなくて。これからはもう泣かないなんて自信もないし」

気力と自信に満ちあふれた様子の今の先生からはとてもそんな姿は想像できなかったが、多分本当のことなのだろう。

少し本音が聞けた気がして、凛はずっと訊きたかったことを思い切って訊いてみることにした。

「——先生は、わたしたちは……高校生は、試合に勝てばいいって考えられてるんですか。中たりがあればいいって」

ちらりとこちらを見て微笑むと、再び前を向く。

「あー、そうだね。そんなふうに見えたんだね。ある意味では、イエス……かな。中たらないと、面白くないでしょう、弓って」

「それはそうですけど……」

「あなたは、弓道に向いてるのかもしれない。真面目で、素直で、根性がある。中たりがなかなか出なくても、ぐっとこらえて教本通りの練習を続けられる。——でもね、学校の部活でやってる人たち、みんながみんなそうじゃないの。基本的にはみんな、今三年間、もしくは大学であると数年。それだけだよ。長いように感じるかもしれないけど、あつという間。チームスポーツも大体そうだろうけど、一人でもできるはずの弓

も、学校出ちゃったらかなやる人はいない。誰でも行ける弓道場もそんなに沢山はないしね。それが現実。あなたは多分、高校だけでやめようなんて、思っでないんだよね」

「はい」

「弓は一生出来るものだし、できたらみんな続けてくれたらいいなとは思ってる。わたし自身だって、たまたまこの学校に来られたから指導と称して続けられてるけど、もしそうじゃなかったらどうなってたか自信ないよ。結婚したり出産したりしてやめちゃう人も沢山いる。女は特だね。——で、多分この三年間……実質二年半？ でやめていく人たちと、あなたみたいにずっと続けていこうと思ってる人を同じように指導することなんかできないんだ。もしそんなことしたら、きつとみんなには、『弓道って辛^{つら}かったな』『つまんなかったな』っていう記憶しか残らないかもしれないんだよ？ そんなのより、なるべく多くのみんなに中た^なりが出たときの気持ちよさとか、試合に勝ったときの喜びとか、そういう想い出を持たせて卒業させてあげたい。そしたら、社会人になって弓を持たなくなったとしても、大人になって余裕ができたとき、もしかしたらまたふと、弓引いてみようかな、って思うかもしれない。他のスポーツと違って、そういうことができるんだよね、弓って」

③ 凜は、文字通り目を開かされる思いだった。そんな視点から弓道を見たことがなかったし、たとえ高校の部活だろうとその指導は一番一所懸命頑張っている人間に合わせて当然とさえ思っているところがあつた。

確かに、綾乃がそうであつたように、同じ部員でも弓に対する温度差は結構ある。そして、凜や部長に比べれば熱意の薄い部員に対し、いくら歯がゆく思ったところで、「同じ熱意を持て」というのがそもそも無理な話だということも分かつてはいた。チームスポーツでない以上、ポジション争いとかもない。そしてまた、試合当日のコンディションや運の要素が強すぎて、熱心な人間ならいい結果が出せるという保証などまる

でないところもまた、強いモチベーションを維持しにくい理由かもしれない。

「——だからね。あなたは、あなた自身の理想に向かって努力すればいいの。正射必中^{注(6)}、大いに結構。でも他の人もみんなそうでなきゃダメだなんて思わないで。早気^{注(7)}かもしれないし照^{注(8)}ってる(弓が反り気味になる)かもしれない。着^{ちやく}装^{そう}も体配^{たいはい}もひどいかもしれない。——あんまりひど

かったら、わたしだって注意するよ。でも、みんなに少しは勝つ楽しさも味わわせてあげたい。それは、中た^なりがあつてこそでしょ」

棚橋先生は、とにかく礼を、射品^{注(9)}をうるさく言う先生だった。すべてにキビしかったかもしれない。吉村先生はその点まるで違う。しかし、彼女の言うことはよく聞いてみればいたつてもつともで、そして棚橋先生の教えとも少しも矛盾してはいないように思えた。

わたしはわたしの射を目指す。それで何の問題があるだろうか。

「——今度の試合が終わつたら……」

凜は言った。

「なに？」

④ 「試合が終わつたら、もうちよつと真面目に斜面の練習してみます。今はちよつと怖いので」

「うん。そうだね。色々試してみても、悪いことはないと思うよ」

吉村先生は振り向いて、にっこりと笑つた。

(我孫子^{あびこ} 武丸^{たけまる}『凜^{りん}の弦音^{つるね}』)

注(1) 大前：弓道の団体戦で、最初に矢を射る人。「二の立ち」「大後」が後に続く。

注(2) 綾乃：凜の友人。

注(3) 射位：道場内の矢を射る位置。

注(4) 射形：矢を射る一連の動作・姿勢。

注(5) モチベーション：意欲。

注(6) 正射必中：「正しい作法で矢を射ると矢は必ず的に中たる」という弓道の理念。

注(7) 早気：弓道の良くない癖の一つ。

注(8) 体配：弓道全般における振る舞い方。

注(9) 射品：矢を射る際の品格。

問一 ――線部 a c について、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直せ。

問二 本文の にあてはまる表現として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

- ア 異を唱える イ 言葉を濁す
ウ 話をそらす エ 理屈を並べる

問三 ――線部①の意味として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

- ア 疎外感を感じていたたまれないさま。
イ 思い通りにならず意欲が湧かないさま。
ウ 疑念が晴れずにつきりしないさま。
エ 心配のあまり何も手につかないさま。

問四 ――線部②について、このときの「凜」の心情の説明として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

- ア 情けない一面を見せた吉村先生を意外に思い、本当に自分に本心を語ってくれるのか、先生を試そうと思っている。
イ 自身の弱さを率直に話してくれた吉村先生に親近感を覚え、踏み込んだ質問をしても答えてくれそうだと思う。
ウ 普段と違う一面を見せた吉村先生に自分への真剣な思いを感じとり、自分も弱さを見せなければならぬと思っている。
エ 吉村先生の話から、先生が自分の弱い部分を隠していたことを知り、今なら先生をやり込められそうだと思う。

問五 ――線部③について、「凜」が「目を開かされ」たのは、「吉村先生」のどのような考えを聞いたからか。空欄に合う形で六十五字以内で書け。

「弓は一生出来るもの」であるから、 という考え。

問六 ――線部④について、このように発言した「凜」の説明として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

- ア 今は射形が崩れるから試したくないが、他の部員の気持ちを理解するためにも斜面に挑戦しようと思っている。
イ 弓道の捉え方が広がり、斜面にも挑戦して色々試す中で自分なりの理想の射を作りあげようと思っている。
ウ これまでの反抗的な態度を改め、吉村先生の指導に従って斜面を練習して試合で勝つ射を目指そうと思っている。
エ 吉村先生の考えは完全には理解できないが、斜面の練習をして「勝つ楽しさ」だけは理解したいと思っている。

問七 本文において「吉村先生」はどのような人物として描かれているか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

- ア 独りよがりな言動をとり部員との深い関わりを避ける人物。
イ 礼儀作法にはうるさいが熱意を持って部員を指導する人物。
ウ 普段の豪快さに反して部員には優柔不断な態度をとる人物。
エ 経験に基づく信念を持って各部員に応じた指導をする人物。

問八 〰〰線部ⅠⅣの表現について説明したものとして最も適当なものを次のアⅠから一つ選び、その記号を書け。

- ア Ⅰは、会話文以外の文章に凜の視点からの語りを挿入することで、凜の心情を読者に直接的に伝えている。
イ Ⅱは、「……」を用いることで、凜が本当は言いたくないことを無理に言おうする様子を表現している。
ウ Ⅲは、倒置法を用いることで、対決姿勢をあらわにし緊張感を高める二人の様子を表現している。
エ Ⅳは、専門用語を多用することで、他の競技にはない弓道の価値の高さを読者に印象づけている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

注(1) はくがさんみ
博雅三位の家に、盗人入りたりけり。三品、板敷の下に逃げかくれに

入った。

三位は、

隠れた。

その後、

残された

けり。盗人帰り、さて後、はい出でて家の中をみるに、のこりたる物なく、

みな盗み出してしまっていた。

残していたのを、

みなりとりてけり。ひちりき一つを置物厨子にのこしたりけるを、三位と

お吹きになっていたのを

遠くで

その音色を聞き、

りてふかれたりけるを、出でてざりぬる盗人、はるかにこれを聞きて、

感情がおさえられなくなって、

語ることは、

たつたいまの

感情おさへがたくして、帰りきたりていふやう、「只今の御ひちりきの

お聴きすると、

趣深く

高貴な音色でありまして、悪い心がすっかり改まりました。

音をうけたまはるに、あはれにたふとく候ひて、悪心みなあらたまりぬ。

盗んだ

全て

お返しいたしましょう

とる所の物どもことごとくにかへしたてまつるべし」といひて、みな置

出て行った。

この
ように、

きて出でにけり。むかしの盗人は、又かくいうなる心も有りけり。

(『古今著聞集』)

注(1) 博雅三位…平安時代中期の貴族。ひちりき(笛)の名手であった。

注(2) 置物厨子…棚。

問一 〰〰〰線部「みる」の主語を本文から抜き出して書け。

問二 〰線部①の意味として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

- ア 三位の家を出て行った盗人
- イ 三位の家に残っていた盗人
- ウ 三位の家に戻って来た盗人
- エ 三位の家を出ようとした盗人

問三 〰〰〰線部を現代かなづかいに直して書け。

問四 〰線部②とあるが、「盗人」はなぜそのようにしたのか。三十
字以内で書け。

問五 〰線部③は、この文章に書かれた出来事に対する筆者の感想を述べた部分である。「いうなる心」とはどのような心か、最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

- ア 弱者を憐れむ心
- イ 自然を愛する心
- ウ 風流を理解する心
- エ 物を大切にする心

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合

上、各形式段落に 1 ～ 10 の番号を付している。

1 「フェールセーフ」という言葉をご存じだろうか。これは、工学における設計思想の一つであり、「機械は必ず壊れる」「誤操作は必ず起こる」ことを前提として、万が一そうなった場合に安全側に制御する手法あるいは原則のことである。

2 この「安全側」という表現は聞きなれないものと思う。たとえば、自動車であれば、コントロール系に障害が発生したときに、自動車が暴走するのではなく、停止するように作動させる設計が、フェールセーフだ。暴走も停止も、走行に対する「障害」であることでは同じだが、「暴走」は危険側であり、「停止」は安全側である、という見方をする。これが工学の基本である。

3 青と赤の二灯の信号機がある。青が進め、赤が停まれだ。何故二つのランプが必要なのだろうか。常に電気を消費する。たとえば、赤のランプだけにして、これが光っていれば停まれ、消えていれば進め、というシステムにすれば、電力が半分になって省エネになる。信号機も簡素になってセイゾウ費も節約できるだろう。一灯で充分な機能の信号機になるのではないか。

4 現実に、そういった信号機はない。もしランプが切れた場合に、停まらなければならないときにその指示ができず、進めと勘違いされるからだ。これは I 側である。では、青のランプ一灯にすれば良いのだろうか。ランプが切れた場合に、停まれになるから、II 側である。けれども、青のランプが光っていないときに、停止の指示なのか、停電や機械の不具合によって信号機が点灯していないのが、判別できない。もし、信号機にトラブルが発生しているなら、できる

だけ早く察知する必要があるだろう。二灯の信号機の場合、両方が消えていれば、機械の不具合がすぐにわかる分、III 側に設計されているといえる。

5 フェールセーフ以外にも、安全を確保する設計思想がある。障害が発生した場合、それが致命的な結果を招かないように、補助をする装置を用意しておく。その補助装置に障害があった場合も想定し、さらに別の装置を用意する。安全を確保するために、二重三重に「バックアップ」を用意して備える、という考え方である。この場合も、「障害は発生するものだ」という立場で備えることに変わりはない。

6 人々は自然^Aの中で生きているが、実際のところ、衣食住など、身の回りにあるもののほとんどは人工の生産品であり、それらの品々すべてが、安全を意識して作られている。だからこそ、今^Bの安全な社会が成り立っている。もちろん、まだまだ不備は多々あり、ときどき事故が起こっているけれど、問題が見つかることに反省し、議論し、改善されてきた。昔に比べれば、格段に住みやすくなっていることは確実であり、こうした安全な社会の基本となっているものが、万が一^Cの^Cことを想定して考えられたシステムである。そして、このような安全を維持していくことで「信頼性」というものが生まれてくる。信頼できるから、安心できるのだ。ひとたびトラブルが起こり、安全が脅かされると、信頼性が失われることになり、大勢が不安を抱く結果となる。安全を連続的に実現するという積み重ねによってしか、信頼は生まれない。安心^③というのは、なかなか得難いものだといえる。

7 さて、ここまで述べてきたように、人間の賢さという^Dの^Dは、悪い事態になったときのことを想定する能力であり、いかなれば、「悲観力」のようなものに支えられているのが、現代社会だといっても過言ではない。

8 機械のトラブルだけではない。人間自身が間違いを犯すことも非常に多い。機械以上に人間は間違えるものである。というよりも、人間が間違いばかりするから、機械が発明され、人間をカバーしているのが本当のところだ。

9 社会は、人間の意思によって動いているわけだから、人間が間違えば、つまり社会、あるいは国家が間違いを犯す。戦争をしたり、搾取をしたり、あるいは虐待・差別をしたり、といった悪い事態は、歴史を遡ればいくらかでも見つけることができる。同じ過ちを繰り返すことも少なくなかった。機械の設計のようなフェールセーフが、人間の社会には不足していたのかもしれない。こういった反省から、民主主義や立憲政治などが生まれたともいえるだろう。

10 「これは戦争につながるものではないか」と疑う、「こういうことは差別を助長しかねない」と心配する。^{注(2)} マスコミなどは、そういった兆候を見逃さず、「警鐘を鳴らす」ことが使命といえる。「ちよっと心配のしすぎではないのか」と思えることも多いけれど、しかし、基本的に「悲観」することが、重大な過ちを繰り返さないための歯止めとなる、という考えに基づいているのだろうか。

(森 博嗣『悲観する力』)

注(1) 省エネ…「省エネルギー」の略。エネルギーを効率良く使うこと。

注(2) マスコミ…「マスコミニュケーション」の略。ここでは大衆への情報伝達を行う機関を指す。

問一 ――線部 a c について、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直せ。

問二 ――線部①と構成が同じ熟語として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア 読書 イ 独立 ウ 絵画 エ 勝負

問三 I III にあてはまる語の組み合わせとして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア	I 安全	II 危険	III 危険
イ	I 危険	II 危険	III 安全
ウ	I 安全	II 安全	III 危険
エ	I 危険	II 安全	III 安全

問四 ――線部②について、「フェールセーフ以外」の「安全を確保する設計思想」に基づいた例として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア 転倒すると自動的に電源が切れる電気ストープ。
イ 一定速度を超えて降下すると緊急停止するエレベーター。
ウ 停電すると蓄電池と自家発電で電源を確保する病院。
エ 吹きこぼれて火が消えるとガスが止まるガスコンロ。

問五 A～Dの のうち、働きが異なるものを一つ選び、その記号を書け。

問六 — 線部③について、「安心」が「得難い」のはなぜか。解答欄に合う形で、「安全」「信頼」という語を用いて四十字以内で書け。

安心は、から。

問七 — 線部④について、人間の社会が「同じ過ちを繰り返」さないために、「マスコミ」はどのような役割を果たすべきだと筆者は考えているか。解答欄に合う形で四十字以内で書け。

マスコミは、という役割を果たすべきだ。

問八 本文の構成について説明したものとして適当でないものを次から一つ選び、その記号を書け。

- ア ②は、①の内容を具体例を挙げてわかりやすく説明している。
イ ④は、③で提起された疑問について具体的な考察をしている。
ウ ⑦は、⑥までの内容をまとめた上で新たな話題を提示している。
エ ⑨は、⑧の指摘に対して歴史的根拠を挙げつつ反論している。

【四】 次の【話し合い】は、中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんがグループで参加するボランティア活動について、協議をしている場面である。【話し合い】と【チラシ】をふまえて、あとの問いに答えなさい。

【話し合い】

A 現在募集中のボランティア活動の【チラシ】をもらってきたよ。どれにしようか。Dさんは今日はいないけれど、どれに参加するかは私たちに任せると言っていたよ。

B どれも面白そうだね。

C 私たちは平日は学校があるし、放課後は部活動に入っている人もいるから、ボランティア活動に参加できない日もありそうだね。特に技能も資格も持っていないけれど、何がやれるかな。

A 図を使ってそれぞれのボランティア活動を比べて、どれに参加するかを決めてはどうかな。縦軸は私たちの「興味・関心の度合い」を、横軸は「参加しやすさ」を表していて、縦軸は上にいくほど興味・関心の度合いが高く、横軸は右へいくほど参加しやすいということになる図だよ。

C それはいいね。興味・関心と言えば、以前から、人との触れ合いができるものがないと皆で話していたよね。

A そうだね。「興味・関心の度合い」はその視点で考えよう。

B では、さっそく①から順に考えていこう。私たちの町は観光地で、外国人旅行者も多いからいろいろな人と触れ合えそうだね。

A うん。でも、もう少し英会話が上達してからじゃないと参加できないかな。③はどうかな。犬の散歩、楽しそう。

C でも、③は①、参加しやすいとは言えないね。人との触れ合いも多いとは言えないかな。④は、一人暮らしのお年寄りも増えていると聞くし、お年寄りとは触れ合いながら私たちが貢献できることもたくさんありそうだね。

A それじゃあまとめると、④に参加するってことでもいいかな。

B そうだね、さっそく申し込みをしよう。いつ参加しようか。

C 来週土曜日の九時から十二時までにしよう。当日は受付場所に集まるうか。

B 了解。Dさんに連絡しないといけないけれど、どう伝えたらいいかな。
C 「私たちのグループは、②。」と伝えたらいいんじゃないかな。
私がDさんに電話をかけておくね。

